

ふためなれば、下座のものかならず持て入へし、扱隣上り敷居に手をかけ、内の様子見合隣上り、蹈石の脇に草履踏揃上り申候、立返り草履を直じ候へば、貴人を後に成申候故、はき捨置也、床のかけ物大目のかざりも見不申候、しかれども貴人見申様にと被仰候時は、床前の脇より掛物のぞき見て、道具疊へうつり、かざりを見申候、貴人御傍通り申候は、腰をかゝめ目に立ざる様に可嗜料理出申候ときも上座を見合物を多く給不申候様に可嗜茶菓子濟候は、菓子盆栗鉢等勝手口へよせ置、扇子など残り不申様見はからひ、御出之節も隣上りより御先へ出ル、罷出しに口傳御草履を直し、御腰物を取さし上、中腰懸へ參圓座をなをし、腰懸のするに縁ばなに手を懸踞ひ居申候、中立以後の作法も右之通りなり、主人貴人御相伴の時だん／＼仕形可嗜事、

〔茶道要録^下〕腰掛法之事

主人貴人ノ御相伴ノ時ハ、御腰物ヲ持テ御腰懸ヘ御供致シ、腰掛ノ下ニ蹲踞テ居ベシ、貴人ヨリ腰ヲ掛ヨト仰アラバ、腰掛ヘ上リテ長リテ可居ナリ、

〔茶之湯六宗匠傳記^五〕小堀遠江守宗甫公自筆の寫

茶碗を跡先にいたゞく事

一御茶飲候而跡さきにいたゞく事、鹿園院殿^{○足利義滿}御馬屋の者に御茶被下候時、あまり忝さ身にあまりたるゆへ、兩度いたゞく也、其を世に見ならひ、尤なる事とて跡先に戴也、

〔諸聞書條々〕一貴人の前にて茶吞事、兩方の手を開て、茶碗を抱て吞也、端へ指をかくる事、比興なる事、

〔備前老人物語〕貴人の御前にて御茶被下候時、左に貴人ましますば、右の手に茶碗をよくもち、左の手を副べし、右に貴人ましますば、左の手に茶碗をよくもち、右手を副べし、もし物おほせかけられたらん時、貴人のましますかたの手をつくべきがため也、相伴の時の事也、